

小説の「読み」とは

——「ことばの森」をくぐり抜けて



森下治生

風はどこから吹いてきたのか？

「「ころ」の授業終盤、「先生と遺書」のテキスト終章近く、「先生」がKの自殺を発見する場面に、こういう記述がある。

「私は枕元から吹き込む寒い風でふと目を覚ましたのです。」

いつもこの場面の授業では、黒板に下宿の間取り図を板書し、(図は夏休みの課題として全文を読ませ、書かせておく。)

そこから当日のKの行動を推理するのだが、板書をしながらいつもは気にしないで読み過ごしていたこの一行に目がとまった。

風はどこから吹いてきたのだろうか？

Kの居る4畳の部屋との間の襖は、「この間の晩と同じ位」

(2尺ほど)開いていた。冷気は気温の低い方から高い方への対流によって流れ込む。つまりその時、Kの部屋は何らかの理由で、「先生」の8畳よりも気温が低かったことになる。冷たい外気が入ったとすればどこから？ Kが外出した様子

はない。とすれば、外気は南面の障子を開けたことによって入ってきたのではないか。そして障子の向こうには、お嬢さんのいる6畳がある。

だとすれば……想像はさらに膨らんでいく。そして、死の直前、障子戸を開けてお嬢さんに最後の挨拶をするKの姿が浮かび上がってくる。

Kの遺書には、お嬢さんのことは一言も書かれていない。そこには逆にKのお嬢さんに対する強いこだわりが感じ取れる。「先生」とKの部屋(あるいは心)を仕切る襖は、「この間の晩(Kが夜中に不意に寝ている私に声をかけた)」と同じくらい開いていた、とある。「この間」とは、まだ「先生」がお嬢さんに結婚を申し込む以前のことであり、Kがそのころすでに自殺を考えていたとすればKの自殺の原因は「先生」の裏切りではないことになる。しかしKはやはりお嬢さんのことを忘れられなかった……。

Kはお嬢さんの部屋へとつながる障子をそっと閉じ、最後に「先生」の部屋との仕切りの襖を開ける。Kと「先生」との心の仕切りは、その時、60センチだけ開かれたのだ。

書かれていること的前提を読む

一般に「ころ」の教科書のテキストはKの死の発見の場面が終わることが多い。三省堂版の現代文の教科書では、次の章、つまり奥さんにKの死を伝えるまでが採録されている。Kは、死後の始末を「先生」に依頼し、土曜日の夜に自殺したのだ。翌日はみんなが家にいる。なぜその日を選んだのか？ そもそも、Kは、外ではなく、なぜこの下宿で命を絶ったのか？ そこには、意識においては近代的自己を貫こうとして

生きながらも、身体的な無意識において、お嬢さんや奥さんとの、本来自らが否定してきた〈家族〉の温もりを求めてしまった、Kの分裂した姿が見える。その明治近代的な分裂こそがKを死に追いやった犯人だ。その行きどころのない魂の「淋しさ」が、最後には、お嬢さんではなく、「先生」の部屋への襖を60センチだけ、開かせたのだ。

「語る」「綴る」「つづ」が意味するもの

人は、「自己」としてしか存在し得ない。「他者」との間には超えられない懸隔がある。だからこそ人はことばによって「他者」に架橋しようとする。換言すれば、コミュニケーションとは、不可能性を前提として成立する逆説的な行為である。遺書を綴りながら、Kの自殺の原因について、「先生」はある認識へとたどりつく。

「私はしまいにKが私のようにたった一人で淋しくってしかたがなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑い出しました。」

Kの自殺の原因が失恋でも現実と理想との衝突でもなく、「淋しさ」であつたとの思い、それは自己省察によるKの発見であり、またKを通しての自己発見でもあつた。「先生」は遺書を綴るといふ、自らを「語る」行為を通して初めて、襖を開いたKの黒い影の中にある淋しさを見いだし、同時に、同じ淋しさの中にいる自己を見いだしたのだ。

「つづ」の「森」をへぐり抜ける

人はことばによって、「他者」に向けて「語る」ことによつて、「自己」を発見し変容していく。そしてそれは決して「語

り手」から「読み手」への一方通行ではない。「語り」を受容する側の「聞き手」「読み手」もまた、「聞く」「読む」行為を通じて、自らの内部で「語る」ことにより、物語を形成し、自己を変容させていくのだ。

『新編現代文 改訂版』（三省堂）所収の「飛行機で眠るのは難しい（小川洋子）」では、偶然飛行機で隣り合わせた男の語る「眠りの物語」が「聞き手」である「わたし」を浄化し、「わたし」は恋人への愛しさを取り戻す。「山月記」では、主人公・李徴は、草叢の中から親友・袁修につらい自己を語る中で最後に人間らしい心を取り戻し、醜い虎と化した自己の真実の姿を晒して去っていく。

人は「語り」といふ、「ことばの森」をくぐり抜けることにより新しい生の可能性を見いだすことができる。そういう観点で見えていくと、「舞姫」の太田豊太郎の手記、「レキシントンの幽霊」の「ぼく」の語り、「原爆・平和教材」である「夏の花」などのテキストもまた新しい相貌で私たちの前に現れてくる。

授業も同じことだ。私たちは教室という共有空間で、小説という深い「ことばの森」の中を、煌めくことばの光の中を、ゆつくり楽しんで歩いていこう。生徒とともに、私たち教授者自身が、読みを通して新しい自己と邂逅するために。

もりした はるお 東京都立文京高校教諭。近・現代の文章を中心に約三十年、高校国語教科書編集に携わってきた。